第 70 回・歴史教育者協議会全国大会（京都大会）レポート
第２１分科会（障がい児教育）

レポート名：光明学校学童疎開記念碑建立の取り組み

―学童疎開記念碑が信州上山田に建立されました―

日時：2018 年 8 月 4 日（土）～8 月 6 日（月）
場所：同志社中学校・高等学校（京都府京都市）

光明学校学童疎開記念碑建立除幕式（2017 年 5 月 21 日：長野県千曲市上山田ホテルにて）

報告者：竹下　忠彦
元東京都立町田の丘学園
（東京都歴史教育者協議会・町田支部）

Ⅰ）はじめに

1945 年 5 月から 1949 年 5 月にかけて、当時日本で唯一の公立肢体不自由校の光明学校《東京都世田谷区》は、長野県の上山田温泉に学童疎開した経験をもつ。疎開先の上山田ホテルの意向を受け、光明養護学校（現光明学園）の元教員、学童疎開関係者が『光明学校学童疎開記念碑建立の会』を立ち上げ、2017 年 5 月 21 日、上山田ホテル内に記念碑を建立した。疎開中の厚遇への謝意と二度と同じ過ちを繰り返してはならないという意味が石碑には込められている。この取り組みを報告する。

Ⅱ）本論

・碑設立までの経過（松本昌介）　**資料１**
・石碑の碑文について　**資料２**
・石碑説明のパネル(の説明文)（竹下忠彦）　**資料３**
・除幕式・祝賀会の様子
　★プログラムより　**資料４**
　★秋山孝さん　「光明学校学校学童疎開記念碑建立への思い」　**資料５**
　★今西美奈子さんのあいさつ　**資料６**
　★写真（回覧）

・反響
　新聞記事　朝日（2017 年 5 月 24 日付け）　**資料７**
　　読売（5/22）、毎日（5/22）、信濃毎日（5/22）
　　長野市民新聞（5/22）、新聞赤旗（8/25）
　ＴＶニュース　ＮＨＫ（長野）ＴＶニュース 18:00 台（5/21）
　インターネット　ＹＡＨＯＯニュース、信毎 web
　地元　清水まなぶ（シンガーソングライター）（コンサート）
　　千曲市教育委員会、県立図書館、信濃教育会（祝賀会参加者）
　　戸倉史談会、歴史教育者協議会、特別支援学校（祝賀会参加者）

Ⅲ）まとめ

・最後にこの石碑建立の課題や意義に触れておく。
① 学童疎開受け入れ地に石碑が建立されたことの位置づけ
② 障害児学校の学童疎開受け入れ地に石碑が建立されたことの位置づけ
③ 受け入れ先の上山田ホテルが発案、光明学校の元教員や、学童疎開関係者たちがそれに応える形で石碑が建立されたこと（設立経過の位置づけ）
④ 学童疎開体験の記憶、戦争体験の記憶の継承　記憶から記録へのきっかけに
　－二度と悲惨な経験【戦争体験】は繰り返さない－
⑤ 光明学校関係者と上山田ホテルや千曲市関係者との交流
⑥ 「信濃路はるか」の刊行、石碑の建立が、光明学童疎開の史実が地域に知られるきっかけに

光明学校の学童疎開受け入れ先

「湯元　上山田ホテル」　長野県千曲市上山田温泉１－６９－３

℡０２６－２７５－１００５

参考資料

「信濃路はるか　光明養護学校の学童疎開」　光明学校の学童疎開を記録する会編
田研出版　　１９９３年

「学童集団疎開史　子どもたちの戦闘配置」　　逸見勝亮
大月書店　　１９９８年

絵本「千曲川のほとりで　～私の学童疎開・上山田ホテル～」文　今西美奈子
まごころの集い社　２０１４年

「あんずの木の下で　体の不自由な子どもたちの太平洋戦争」　小手鞠るい
原書房　　２０１５年

「障害児学童疎開資料集　全４巻」松本昌介、飯塚希世、竹下忠彦、中村尚子、細渕富夫
六花出版　　２０１７年

記念碑設立の経過報告

昭和２０年５月１５日、戸倉駅から２台の貸し切りバスで、身体の不自由な児童と付添の教職員、父母がここ上山田ホテルにやってきました。障害のない児童の学童疎開より１年近く遅れての疎開でした。

それでも身体の不自由な子どもを扱ったことのないホテルでは、従業員全員で誠意を持って子どもたちの世話をしました。

村の人々も温かく見守りました。

校舎が焼けたため、東京に帰ることもできず、戦後４年間もここ上山田ホテルで生活するしかありませんでした。戦争が終わったとはいえ、不自由な生活は続きましたが、近隣の村から婦人会などが野菜を届けるなど、多くの人たちが応援してくれて、不自由児たちは大過なく疎開生活を続けることができました。

光明学校が上山田に疎開した１０日後、山の手空襲によって校舎は焼失しました。全員が寝泊まりしていただけに疎開が後１０日遅かったらどうなっていたでしょう。

上山田ホテルが不自由児を大切に守ったということはあまり公にはなっておりませんでしたが、近年口伝えに、あるいは研究者の報告などによって広く知られるようになりました。

県立長野歴史館の企画展でもこの疎開が取り上げられました。

この事実は不自由児教育の歴史からも、長野県教育の歴史からも特別注目されて良い出来事であります。この記録を何らかの形で残しておきたい。

ホテルの大女将、若林和子さんは記念碑を建てることを思いつきました。１年前、昨年３月のことです。さっそく光明学校の校長に気持ちを打ち明けました。話は校長から現旧の職員に広がりました。同じ思いを持っていた方たちの共感を呼び、「光明学校学童疎開記念碑建立の会」が結成され

ました。以来毎月１回合計１０回の会議が開かれ、ホテル社長若林正樹さんも数回参加して、記念碑建立の具体化を相談しました。

建立の会のメンバーは、光明学校の現旧の校長、教職員、卒業生の会仰光会会長、研究者などに加えて学童疎開生活を送った卒業生などです。

記念碑の石の選定、デザイン、募金集めなど、取り組むべき課題が多く、議論は白熱しました。

記念碑に期待する声は多く、特にこのホテルに宿泊した方たちからはあたたかい応援をいただきました。

基金は匿名寄附も含め、予想を超えて７６人から約７２万円いただきました。

今に引き継がれている上山田ホテルの温かさ、障害を持ちつつも、努力して生きている肢体不自由児の姿に少しでも応援できればというお気持ちの表れと思います。

記念碑の中央には当時の教員波田野忠雄先生が書いた少年少女の姿、二人が見つめる方には疎開生活を詠んだ佐藤彪也先生の俳句を入れました。

そしてそれを組み合わせて疎開児童で世界的なデザイナーの宇野泰行さんの助言を得て全員でデザインを作りました。

記念碑の作製は松代の新井美術彫刻石材店がすばらしい大小の石の記念碑を作ってくれました。

上山田温泉、上山田ホテルを訪れる方がこの碑を眺めて、不自由児たちとホテルの暖かいふれあいを感じていただければありがたいと思います。

２０１７年５月２１日

光明学校学童疎開記念碑建立の会　事務局長　松本昌介

信濃路はるか
肢体不自由児学童疎開の地
東京へとどかぬ泣く声秋の暮れ
すりきれしホテルの畳慰問柿
疎開引率者 波田野忠雄
(光明国民学校訓導)
疎開引率者 佐藤彪也作
(光明国民学校訓導)
一九四五(昭和二十)年五月十五日、肢体不自由児六十名余が、東京の戦火を逃れて、ここ上山田ホテルに疎開した。ホテルの方がた、上山田の人びと、学校職員などに守られて、一九四九(昭和二十四)年五月二十八日まで、無事過ごした。感謝の気持ちを込めてこの碑を建てる。
二〇一七(平成二十九)年五月二十一日
光明学校学童疎開記念碑建立の会

「信濃路はるか　―肢体不自由児の学童疎開の地―」の由来について

上山田ホテル玄関には、「信濃路はるか　―肢体不自由児の学童疎開の地―」という石碑が建っている。これは戦時中、東京の肢体不自由児の学校の児童がこのホテルに集団疎開したことを記念して建てられたものである。

昭和２０（１９４５）年５月１５日に東京都立光明（こうめい）国民学校《当時》の肢体不自由児約６０人は、教員、保母、看護婦などに引率されてここ上山田ホテルに疎開した。同年８月に戦争は終わったが、東京の校舎は空襲で焼失し、帰京することができず、戦後４年間このホテルで生活した。昭和２４年５月にようやく引き揚げることができた。　肢体に不自由をかかえた児童たちに対して、町の人々、ホテルの従業員は暖かく接し、また県内各地から季節の野菜、果物などが届けられたりした。障害児を暖かく守ったこの上山田の人々に感謝の気持ちを伝えたいという願いをこめてこの記念碑を建てることになった。疎開学童、光明（こうめい）学校の卒業生、現在および過去に光明（こうめい）学校や他の障害児学校に勤務した教職員、全国肢体障害者団体連絡協議会役員、その他この疎開を支えた人々、疎開の事実を世に広めた研究者などが浄財を提供してくれた。

このパネルの上部に掲げてある陶板は、疎開参加児童の一人今西美奈子が出版した絵本「千曲川のほとりで」の表紙である。

平成２９（２０１７）年５月２１日

光明（こうめい）学校学童疎開記念碑建立の会

光明学校学童疎開記念碑建立

除幕式　祝賀会

信濃路はるか

２０１７年５月２１日(日)

長野県千曲市上山田ホテルにて

除幕式　　司会　若林美子　　（11 時開始）

建立者代表あいさつ　　若林正樹

建立までの経過報告　　松本昌介

神事

除幕　　記念写真撮影

祝賀会　　司会　若林美子　竹下忠彦　　（12 時開始）

開会のことば　上山田ホテル社長　　若林正樹

あいさつ　　上山田ホテル大女将　若林和子

学童疎開記念碑建立の会代表あいさつ　秋山　孝

光明学園校長　　田村康二朗　様

千曲市教育長　　（　　）様

乾杯　　今西美奈子

会食　　DVD 映写「松葉杖と戦争」テレビ信州

アコーディオン演奏

出席者紹介

スピーチ

あいさつ　　学童疎開記念碑建立の会事務局長　　松本　昌介

閉会のことば　牧島　ミリ

光明学校学童疎開記念碑建立への思い

光明学校第 10 期　　秋山　孝

私は、戦時中の学童疎開体験者です。光明の子どもたちは身体が不自由だから戦争の役に立たないと、学童疎開からはずされていました。羽根木公園から見る東京大空襲は恐ろしかったです。そんな中、長野県の上山田ホテルの若林正春さんが、松本保平校長の熱意に動かされて、私たちを受け入れてくれました。1945 年 5 月、私たちと、先生方、保母さん方、看護師さんなどたくさんの人たちを受け入れてくださいました。あと 10 日遅かったら、山の手大空襲の犠牲になるところでした。ホテルの方々だけでなく、上山田村の人々も、私たちを差別することなく、意地悪言われることなく、幸せに過ごさせてくれました。そのおかげで、一人の犠牲者も出さずに生きて 1949 年に東京に帰ってこられました。私たちは心から感謝しています。E テレの「戦闘配置されず」の番組つくりに参加しましたが、感謝の気持ちを、上山田の地に残したいと思いました。そんな折、大女将の若林和子さんから、ホテルに記念碑を建てたいというお話をいただきました。「学童疎開などしなくてよい、二度と戦争を起こさないことへの願い」をこめて建立するとのこと、心からありがたく思いました。疎開当事者としての私が実行委員長をお引き受けし、先生方にお世話になりながら進めているところです。是非、この事業を成功させたいと思っています。

森田拳次先生寄贈（Eテレ「戦闘配置されず」より）

記念碑建立について

光明学校学童疎開記念碑建立の会

光明学校学童疎開の記念碑を建てたいという思いが、ホテルからと疎開参加者、光明学校の現旧職員などから同時に出てきました。昨年 2016(平成 28)年初めのことです。早速関係者、共鳴してくれる方たちと連絡を取り、「光明学校学童疎開記念碑建立の会」を立ち上げました。ホテルの入口に立って、宿泊する方が眺めて「ああ、ここに肢体不自由児が疎開したのか。ホテルや村の人たちが暖かく守ってくれたのか」と、感じてもらえれば嬉しい、また、この事実を後世に語り継ぎたい、という気持ちで会を重ねました。　堅苦しい由来はいらない、障害児を守ってくれた方たちに感謝の気持ちが伝わればいいと、そんな願いをこめた、きわめてシンプルな記念碑となりました。　この記念碑を作るに当たっては、80 人ほどの関係者、疎開参加者、光明学校の現旧教職員、同窓会会員、東京都障害児学校の現旧教職員、肢体障害者団体役員、研究者、「光明学校の学童疎開を記録する会」のメンバー、上山田ホテルなどから、多額の浄財が寄せられました。

この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

光明学校学童疎開記念碑建立の会

代表　　秋山　孝　（疎開体験）
今西美奈子（疎開体験）宇野泰行（疎開体験）
市橋　博　（同窓会「仰光会」会長）
若林正樹　（上山田ホテル社長）若林和子（上山田ホテル大女将）
神山　寛　（第 14 代校長）　三室秀雄　（第 15 代校長）
田添敦孝　（第 16 代校長）　篠崎友誉　（第 17 代校長）
牧島ミリ　（旧教員）
事務局長　松本昌介　（旧教員）
中村尚子　（研究者）　竹下忠彦　渡辺美佐子　並木君江（旧教員）

光明学校学童疎開記念碑建立への思い　　第10期　秋山　孝

私は、戦時中の学童疎開体験者です。「光明の子どもたちは身体が不自由だから戦争の役に立たない」と、学童疎開からはずされていました。羽根木公園から見る東京大空襲は恐ろしかったです。そんな中、長野県の上山田ホテルの若林正春さんが、松本保平校長の熱意に動かされて、私たちを受け入れてくれました。1945年5月、私たちと、先生方、保母さん方、看護師さんなどたくさんの人たちを受け入れてくださいました。あと10日遅かったら、山の手大空襲の犠牲になるところでした。ホテルの方々だけでなく、上山田村の人々が、私たちにやさしくしてくれて、差別することなく、幸せに過ごさせてくれました。そのおかげで、一人の犠牲者も出さずに生きて1949年に東京に帰ってこられました。私たちは心から感謝しています。NHKテレビのEテレ「戦闘配置されず」の番組つくりに参加しましたが、感謝の気持ちを、上山田の地に残したいと思いました。そんな折、大女将の若林和子さんから、ホテルに記念碑を建てたいというお話をいただきました。「学童疎開などしなくてよい、二度と戦争を起こさないことへの願い」をこめて建立するとのこと、心からありがたく思いました。疎開当事者として、ふつつかながら私が学童疎開記念碑建立の会の代表をお引き受けし、先生方にお世話になりながら進めているところです。是非、この事業を成功させたいと思っています。

こんばんは、大阪から参りました今西美奈子と申します、光明学校昭和２５年度、１９５０年度中学部卒業生です。

今回、明日の除幕式に参加させて頂く喜びに加えて、当時の仲間たちに何十年ぶりかで会えるかともいう楽しみがもう一つあったのですが、先輩、同輩、後輩の別なく、加齢に伴う障害の悪化で動きにくくなっている人、又、施設入所で外出も難しくなっている人たちが多く、一人での参加になってしまいました。

私も例外ではなく還暦ぐらいまでは松葉づえで歩き回っており、車にも乗っていたのですが、手足の力が衰えて７０歳で免許を返上しました。８０を越えた今は車いすが離せなくなっています。幸い今回は所属している「まごころの集い社」の会長も参加のため車に同乗させて貰えて、ガイドヘルパーさんにも付き添って貰えましたので参加出来ました。３日間ガイドヘルパーさんに付いて貰うのは、ヘルパーさんの数が少ない事もあって難しいのですが、こちらの堀本さんが所属しておられる事業所の代表の方が車いすの男性で、この車いすの女性の希望を何とか叶えてあげようといろいろ考えて下さったそうです。

さて本題の光明学校の疎開の話に入りますが、私はみんなと一緒に東京からの集団疎開ではなくて、終戦の前の年の暮れに、当時長野市内の善光寺に近い東町に在りました父親の弟にあたる叔父の家に、大阪から家族全員で縁故疎開をしまして、私は従妹が通っていた後町小学校に３年生の３学期から転校しました。昭和９年生まれですから本来なら４年生になっていたところですが、就学猶予という障がい児は学校に来なくても良いよ、という制度があって１年遅れの就学で３年生でした。終戦を迎えたのは４年生の夏休み中で、２学期が始まったある日、戦争が終わって他の普通校の児童たちは次々と東京へ引き揚げる中で、肢体不自由児の学校である光明学校は校舎も寄宿舎も爆撃で全焼しているので、いましばらく疎開先の上山田ホテルにとどまる、という信濃毎日の記事を読んだ母親の判断で、２学期の途中で後町小学校から光明に転校した変則的な学童疎開児童でした。

光明学校の学童疎開の実現までには、当時の松本保平校長先生の並々ならぬご苦労があったこと、また５０人を越える１０歳前後の障がい児を受け入れ、その後４年間にも及ぶ日々を慈父のような温かさで包んで下さったこのホテルのオーナーであり村長さんでもあった、今は亡き若林正春様の偉大さ等を知ったのは、卒業後、それも成人に近くなってからのことでした。　校長先生はいつも「村長さんやホテルの人たちに廊下などで会ったらちゃんとご挨拶するんだよ」とおっしゃっていましたが、私たちが「お早うございます」「こんにちは」と申しますと「おはよう」「はい、こんにちは」と応えてくださいました。番頭さんの戸田さんとおっしゃる方は

「元気かい」「良い子にしているかい」と笑いかけてくださいました。
　あの日本中が困難を極めた時代の中にありながら、私たちはこの地での４年間を、お日さまの温かさに包まれて、ホテルの方々、先生、保母さんに、そして上山田じゅうの皆様に育てて頂いたと思っています。

　学童疎開の仲間入りをしたのは一歩遅れてでしたが、４年を経て全員東京への引き揚げの際には、私は校医伊藤京逸博士の執刀で膝関節を伸ばす手術を受けるため、一足早く上京しました。そのころはすでに家族は叔父宅から大阪に引き揚げていましたが、私に付き添うためホテルに来た母と共に東京駅に着いた時のことは忘れられません。駅構内には米軍の爆撃によって家や親を失くした子どもたちが大勢いて、行き交う人々に食べ物を求めているのです。戦災孤児、浮浪児などと呼ばれていた子どもたちでした。

　足早に過ぎる人々の中で、足早とは行かない私たち母子は格好の標的となりましたが、母は「おばちゃんたちも何も持ってへんのよ、堪忍してな」と謝り続け、私は松葉づえを蹴飛ばされないかと震えながら歩きました。駅を出ると、歩道に白衣を着て戦闘帽を目深にかぶり、戦場でもぎ取られた手足の断片をむき出しにした元兵士たちが数人、道ゆく人に物乞いをしていました。悲しげな音色でアコーディオンを弾いている人もいました。戦後の悲惨さは本や新聞などで見たり、又聞いたりしていましたが、いつも周囲の人たちに守られていたような私は恐ろしくて、戦争のむごさ、理不尽さの一端を実感として知った出来事でした。

　学童疎開参加者の生徒たちが卒業後に赴任された松本昌介先生が、疎開に関する資料を学校内で見つけられて、各地に散らばる卒業生を精力的に訪ねて話を聞かれ、つぶさに資料を調べ挙げて「信濃路はるか」を出版されたのは２０数年前になりますが、その時参加させて頂いたご縁でその後もいろいろご指導を頂きました。戦火を逃れるための学童疎開のことをいつか絵本に書きたいと思っていましたが、幸い「まどころの集い社」の発足６５周年の記念事業として会員２人が書いた縁故疎開、学童疎開に関する絵本を出版して貰えました。

　今回、記念除幕式に参加させて頂けますことを感謝申し上げますとともに、ホテルの皆様はじめ、上山田全体の皆様に疎開児童全員からの心からの御礼を伝えさせて頂きます。　有難うございました。

２０１７年５月２０日　今西美奈子
（除幕式前日のスピーチ・上山田ホテルにて）

肢体不自由児学童疎開記念碑建立除幕式を伝える新聞報道

2017年

障害児疎開 伝える碑

上山田ホテル 60人受け入れ

除幕式に参加した（前列左から）今西さん、松本さん、若林さん

太平洋戦争中、身体に障害のある子供たちの疎開を、上山田ホテル（千曲市上山田温泉）が受け入れた。児童約60人が戦中戦後の4年間を過ごしたことを伝える記念碑が同ホテル内に完成し、21日、除幕式が行われた。

東京市立光明学校（現・東京都立光明学園）は、1932年に創立された日本初の身体障害児のための学校。戦火が東京にも及び、各学校が続々と疎開する中、障害児童の受け入れ先はなかなか見つからなかった。

45年5月15日、同市の上山田村の村長・若林正春さんが、ホテルに子供たちを迎え入れた。10日後、同校校舎の大部分が空襲で焼失したため、49年に新校舎が完成するまで、子供たちは同ホテルで過ごした。疎開中は村民に温かく迎えられ、県内の自治体などから野菜や果物の寄付もあったという。

記念碑の設置は光明学校の元教諭、松本昌介さん（80）や同ホテルの大女将・若林和子さん（85）が中心となり、約1年前から進められてきた。疎開した元児童らも呼びかけ、石碑の建設費約72万円を集めたという。記念碑には、引率の教師が描いた子供たちの姿が描かれている。

除幕式には約50人が参加した。疎開児童の一人、大阪府枚方市の今西美奈子さん（82）は「困難な時代に、上山田の人たちの温かさで育てていただいた。雪遊びや千曲川のほとりでの川遊びはいい思い出だが、子供が疎開しなければならない時代が二度と来ないでほしい」と話していた。

5/22読売新聞

湘南に1―2連敗 降格後初

山雅 再頂戦

同点ゴールを放ったFW石原（左）（21日、松本市のアルウィンで）

サッカーJ2・松本山雅は、アルウィンで、J1降格後初の連敗となった。J2降格は5勝4分け1敗（19）。次節はホームでツエーゲン金沢と対戦し、折り返した山雅は直後に先制されて、中央左でスローを受けたFW石原選手のミドルシュートが62分に左クロスを湘南に頭で合わされ、決勝点を奪われた。

これで5試合無勝利。反町康治監督は「責任を感じている。（今季は）厳しい戦いになることは分かっている」と声を振り絞った。

5/22毎日新聞

千曲・上山田温泉に記念碑建立

障害児疎開 語り継ぐ

「戦争の反省感じて」

旧東京市立光明学校生徒ら

太平洋戦争末期、旧東京市立光明学校（現・都立光明特別支援学校）が千曲市の上山田温泉で体験した学童疎開を語り継ごうと、疎開先だった上山田ホテル内に記念碑が建立された。21日に元生徒やホテルの関係者ら約50人が出席して除幕式が行われ、苦しかった時代に思いを巡らせた。【カン・クリスティーナ】

光明学校は、肢体不自由児たちが治療を受けながら学べる初の学校として1932年に東京の旧麻布区（現港区）に設立された。のち世田谷に移った。

戦争が激しさを増し、政府は44年6月以降、大都市に住む学童の集団疎開を進めた。健常児の疎開先は行政当局が探したが、将来兵役などに適さないとされた障害児たちは対象から除外された。だが、45年3月の東京大空襲の被害に危機感を持った当時の松本保平校長は、自ら疎開先を粘り強く探し回った。同年5月15日に上山田温泉へ児童・生徒や教員らが疎開することが決まり、約80人の新生活が始まった。疎開生活は、空襲で被害を受けた東京の校舎が再建された49年5月まで続いた。

記念碑のプレートを眺める今西美奈子さん＝千曲市の上山田ホテルで

記念碑は、元生徒らが実行委員会を作り、募金協力を呼びかけ建立した。表面に「信濃路はるか」という言葉が刻まれた。東京から遠く信濃まではるばる疎開したいという生徒たちの思いが込められている。

この日、当時の生徒で学童疎開を経験した今西美奈子さん（82）＝大阪府枚方市＝が出席し、「記念碑は、平和を望んでいる気持ちが伝わってくる。早く同級生に報告したい」と喜んだ。疎開していた日々を、親と離れ夜泣きする子どもがいて、食べ物もなくつらかったが、村の人たちが温かく迎えてくれたと振り返った。学童疎開が絶対起こらないように経験した人が語っていかなければいけない。記念碑を見て、当時、起きたことの反省を感じてほしいと語った。

5/22長野市民新聞

集団疎開の記念碑

た今西美奈子さんと石碑

上山田ホテル＝上山田温泉＝の入り口に、太平洋戦争末期から戦後にかけて身体障害児の学校（光明国民学校（現・東京都立光明学園））の集団疎開を受け入れた歴史を伝える記念碑が建てられ、21日に碑前で除幕式があった。参加した関係者ら約50人は、疎開を経験した先人の苦労をしのび、不戦を誓った。

◇

同学校は、1932（昭和7）年に設立。45年5月15日から4年間、同ホテルに疎開した。それまで生活していた東京の校舎は、疎開から10日後に空襲で焼失したという。

同ホテルの経営者で、上山田村の村長を務めた故若林正春さんが障害者を重荷と感じている戦時の風潮によって障害児の疎開先が見つからないことを知り、職員を含め約80人を迎え入れた。

当時の関係者によると、子供は、体や足に歩行用の装具を着けているため、建物の床や壁を傷付けることもあったが、ホテル側は気にしなかったという。村人も路上で声を掛けるなど温かく見守ってくれたという。

記念碑は、県立歴史館＝屋代＝が15年に行った戦後70年の企画展で、同ホテルの疎開を紹介したのがきっかけ。障害者や子供を社会的弱者に犠牲を強いる戦争の悲惨さを後世に伝えるためにホテルや学校関係者が「記念碑建立の会」を設立し準備を進めた。賛同者76人から70万円余の資金が集まったという。

記念碑は、高さ約1メートル60センチの二つの石で、「信濃路はるか」の文字や障害児の絵、疎開の経緯が彫られている。

疎開者として唯一除幕式に出席した今西美奈子さん（82）＝大阪府枚方市＝は「困難な時代だったが、上山田の人々の温かさの中で育つことができた」と回顧。同ホテルの大おかみ・若林和子さん（85）は「平和な世の中を守っていってほしい」と話していた。

上山田ホテルで除幕式

身障児 苦難の歴史

5/22信濃毎日新聞

記念碑を囲んで記念写真に納まる（前列右から）若林さん、松本さん、今西さん＝21日

障害児の疎開 後世に

千曲 受け入れ先と学校が協力 記念碑建立

太平洋戦争末期から戦後にかけての4年間、体が不自由な子どもの日本初の学校「東京都立光明国民学校」（現光明学園）の学童疎開を受け入れた千曲市上山田温泉の上山田ホテルに記念碑が完成し、21日、除幕式があった。多くの支えで実現した疎開を後世に伝えたいと、交流を続けてきたホテルと学校側が協力して設置。約50人が集まり、「学童疎開をするようなことが二度とないように」と願った。

疎開は1945（昭和20）年5月から。障害児の疎開先が見つからない中、当時の松本保平校長の直談判に、旧上山田村長だった若林正春・同ホテル社長が児童約60人を迎えると決めた。疎開から10日後、同校は空襲で焼失。体や足の装具でホテルの畳やふすまは傷んだが、同校が再建される49年5月まで、営業を休んで児童を受け入れ続けた。近隣住民らも野菜などを差し入れてくれたという。

54年に嫁いだ大女将の若林和子さん（85）は、義母や従業員から疎開児童の話を何度も聞いた。昨年3月、「うちで過ごした人や受け入れた先祖のために碑を残したい」と学校側に相談。すぐに当時の児童や元教員らが「記念碑建立の会」を立ち上げ、寄付を募ると、各地の76人から70万円余りが集まった。

碑は高さ約1メートル60センチの二つ。中央に黒御影石をはめ、大きい碑には「信濃路はるか」と記した。建立の会事務局長で元教員の松本昌介さん（80）＝東京＝の尽力で93年に発行した疎開の記録のタイトルという。当時の引率教員がホテルへの感謝を詠んだ「すりきれしホテルの畳 慰問袋」などの俳句と、別の教員が描いた松葉づえを持つ子どもの絵も刻んだ。小さい碑には疎開の概要を彫った。

当時の児童も参加 平和願う

当時の疎開児童でただ一人、除幕式に参加できた今西美奈子さん（82）＝大阪府枚方市＝は「食料難で大変だったが、上山田の人たちの優しさに包まれたとがそれを上回っている」と振り返り、「こうした時代があったことを多くの人に知ってもらいたい」と話していた。

5/26朝日新聞

肢体不自由児疎開の地 刻印

「光明国民学校」上山田ホテルに記念碑

戦争中、千曲市の上山田温泉に集団疎開した東京の光明国民学校（現東京都立光明学園）の記念碑が日曜、疎開先だった上山田ホテルの前庭に建立され、除幕式があった。碑には「信濃路はるか 肢体不自由児学童疎開の地」の文字が刻まれた。式に出席した疎開児童の一人、今西美奈子さん（82）＝大阪府枚方市＝は「長い間待った記念碑が出来た。うれしい。疎開してお世話になったことをありがたく思い出す」と話した。

当時、光明国民学校（東京都世田谷区）は公立で唯一の肢体不自由児の学校。寄宿舎を備えて生活した。

敵に迫い、政府が疎開の推進を閣議決定し、学童疎開が本格化した。普通は保護者が疎開して受け入れ先を探す。疎開先は自分で見つけるしかないと決断。東京都長野市山田所へ、続いて上田村（現千曲市）へ、後回しにされた。上田村では、上山田ホテルを経営していた若林正春村長と、寄宿舎の舎監を務めていた故若林和子さんが、「平和な世の中を守っていってほしい」と話していた。

中で歩行訓練をする児童（市の協賛財団提供）

碑文には「ホテルの方がた、上山田の人びと、学校職員などに守られて、無事過ごした。感謝の気持ちを込めてこの碑を建てる」などと記されたこの碑を上山田温泉の上山田ホテル

戦争中、光明学園は、戦火が東京にも及び、各学校が疎開する中、障害児童の受け入れ先はなかなか見つからなかった。

45年5月15日、同学園の校舎の大部分が空襲で焼失したため、49年に新校舎が完成するまで、子供たちは同ホテルで過ごした。疎開中は村民に温かく迎えられ、県内の自治体などから野菜や果物の寄付もあったという。

記念碑の設置は光明学園の元教諭、松本昌介さん（80）や同ホテルの大女将・若林和子さん（85）が中心となり、約1年前から進められてきた。疎開した元児童らも呼びかけ、石碑の建設費約72万円を集めたという。記念碑には、引率の教師が描いた子供たちの姿が描かれている。

除幕式には約50人が参加した。疎開児童の一人、大阪府枚方市の今西美奈子さん（82）は「困難な時代に、上山田の人たちの温かさで育てていただいた。雪遊びや千曲川のほとりでの川遊びはいい思い出だが、子供が疎開しなければならない時代が二度と来ないでほしい」と話していた。

疎開の10日後、世田谷の校舎が空襲を受け、教室の一部を残して焼け落ちた。児童らの命を守る、ぎりぎりの時期での疎開だった。

そして、終戦。が、学校の再建はやはり後回しになり、帰る学校のない児童らは、その後もホテルにとどまった。帰京したのは学校が再建された49年5月。疎開生活は丸4年に及んだ。

式に臨むつばさ松本校長の長男伸一さん（73）＝千葉県船橋市＝は「感無量です。父が生きていたら喜ぶだろうなと思います。また、記念碑建立の事務局長を務めて、これまでに疎開体験者の手記などを刊行してきた「光明学校の学童疎開を記録する会」代表の松本昌介さん（80）＝東京都板橋区＝は「松本校長の努力により、若林村長の思い切った決心があった。あのすさまじい戦時下にあって、ひと筋の人の温かい心があったと」と話した。

記念碑は、戦後70年を機に話が持ち上がり、卒業生や教職員OB、関係者らが「光明学校学童疎開記念碑建立の会」を立ち上げ、寄付金を集めて建てた。除幕式には同校関係者や地元関係者ら約50人が出席し、記念碑の完成を祝った。（鈴木基弘）